

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：34314

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530895

研究課題名（和文） ネットいじめの実態とその背景となる要因に関する実証的研究

研究課題名（英文） Substantial study on the cyber-bullying and its background

研究代表者

原 清治（HARA KIYOHARU）

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：20278469

研究成果の概要（和文）：いじめはこれまでも子どもたちや社会の様態にあわせてさまざまに深化してきた。今日では「匿名性」を特徴とするネットやケータイを利用したいじめが多く発生している。本研究ではネットいじめの発生要因について分析し、ネットいじめの新たな視点を提供することを目的とした。結果として、ネットいじめの要因として①ケータイの依存度の高さ（ケータイの使用時間、メールの送信回数）、②性別、といった従来の要因だけではなく、③学力移動によってネットいじめの被害に大きな差異が生じることが明らかとなった。また、④学校によってネットいじめの被害に大きな差異はみられず、学校文化による影響をネットいじめは受けにくいことも明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：The bullying deepened in accordance with children and social appearance variously so far. In addition to that, a lot of bullying using a internet or a mobile phone with "the anonymity" occurs today. I made the analysis that I was in an outbreak factor of the cyber-bullying in this study and was intended that I provided a new viewpoint of the cyber-bullying. As a result, I analyzed 4 typical background of the cyber-bullying. ①high dependence to the mobile phone (using time for mobile phone or email), ② female rather than male tend to rely on the mobile phone, ③ scholastic ability could be a factor of the cyber-bullying, ④ the cyber-bullying was hard to receive influence by the school culture.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育社会学

キーワード：ネットいじめ、学力移動

## 1. 研究開始当初の背景

いじめはこれまでも子どもたちや社

会の様態にあわせてさまざまに深化して

きた。そこで文部科学省は2007年1月にいじめを再定義し、その今日の特徴をより現状に符合させた形で理解しようとしている。その特徴は、①遊びやふざけのなかにいじめが入り込み、第三者からは見えにくいという「**フレーム間の矛盾**」、②学校で一人になる不安感や恐怖感からとりあえずグループに所属し、そこでいじめられても抜け出すことが困難な「**依存関係のいじめ**」、③所属する集団によって加害・被害の関係が変化する「**立場の逆転現象**」などが指摘されている（清永賢二：2000、森田洋司：2001、原：2005）。こうした問題の共通点は、いじめが一定の人間関係をもつ集団のなかに入りはじめたことであった（原：2007）。

それに加えて、今日では「**匿名性**」を特徴とするネットやケータイを利用したいじめが多く発生している。この新たないじめは、誰が自分をいじているのかわからない点が、子どもたちの「**人間不信**」を煽り、大きなストレスとなっている（原：2007）。ネットいじめから子どもたちを守るための本質的な取り組みが喫緊の課題となっている。

## 2. 研究の目的

本研究では、

- ①京都府及び京都市教育委員会の協力を得て、京都府下の小・中・高等学校に在籍する児童生徒およびその保護者を対象とした上で、ネットいじめの発生頻度や性質の違いを従属変数、学力や家庭的背景、学校文化などの子どもたちを取り巻く環境を独立変数としてネットいじめを捉えた場合、どのようなメカニズムによってネットいじめが発生するのかを精緻に分析し、**いじめ研**

**究における新たな視点を提供すること。**

- ②海外でのネットいじめの実態を捉えるために、アメリカ、イギリス、韓国の3カ国を比較対象国として選定し、情報先進国のネットいじめの現状について分析し、**日本との相違点**を明らかにすることを目的としている。

## 3. 研究の方法

本研究はいじめ問題からの知見を基底におきながら、「ネットいじめ」を計量的・構造的に捉えるための分析枠組みを構築し、質問紙・インタビュー調査を実施する。もってネットいじめの実態とその背景となる要因を実証的に明らかにしようとするものである。平成21年から平成23年にかけて、京都市および京都府下の小学校、中学校、および高等学校においてアンケート調査を実施した。また、いくつかの学校では、保護者を対象としたインタビュー調査も実施している。

アンケート調査を実施する一方で、イギリス（平成21年）、アメリカ（平成22年）、香港（平成23年）における諸外国でのネットいじめ（Cyber-bullying）の実態に関する資料収集およびインタビュー調査を行った。

## 4. 研究成果

研究成果としては以下の5つに集約できる。

### 1) ネットいじめの学年別推移

今回の調査データからは、小学生で12.5%、中学生で29.7%、高校生で21.5%という結果が出ている。ネットいじめの被害は経年変化でみると増加傾向にあり、また、中学生までは学年進行に伴ってその割合も拡大する。とりわけ中学生においてもっとも被害の割合が高くなることがわかる。

	小学校	中学校	高等学校
本調査(2010)	12.5%	29.7%	21.5%
(参考) A 市	6.3%	23.7%	18.1%

## 2) ネットいじめの内容

ネットいじめは大きく二つに分類できる。ひとつは「直接型」で、本人のプロフやブログに悪口を書き込んだり、勝手にホームページ内容を書き換たり、メールに「キモイ」「早く死ね」といった誹謗中傷を書き込んで送りつけたりする類のものである。もうひとつは「間接型」といわれ、典型的な例が「学校裏サイト」や2チャンネルなどの掲示板を使って、「〇〇高校の△△はウザイ」とか、「●年●組の××、ムカツク」といった具体的な個人名をあげて誹謗中傷の書き込みをするケースである。これは、本人が検索しなければ自分のことが書き込まれているかどうかわからないが、書き込みがあったことを発見した時のショックは大きい。そうした意味では落とし穴を掘ってターゲットがはまるのを楽しむ「落とし穴」型のいじめとも換言できる。

	小学校	中学校	高等学校
直接型	9.6%	19.6%	7.8%
間接型	2.9%	10.1%	13.7%

表は学年別における直接型と間接型のネットいじめの被害の割合を表したものである。ここからは、学年が進行すると間接型の割合が増加することがわかる。とりわけ、中学生や高校生においては、ネット上の掲示板などに自宅の住所や電話番号、ケータイ番号

	よく	まあ	あまり
よく	6.0%	8.7%	10.5%
まあ	16.3%	8.0%	13.0%
あまり	23.1%	13.0%	7.2%

やメールアドレス、顔写真などの個人を特定する情報を公開する「さらし」と呼ばれる間接型のネットいじめが増加する。本人が知ら

ないままに誹謗中傷がネットの世界で行われ、それに気がついたときに被害者が大きな精神的ダメージを受けるのである。

本調査からも、自分に対して心無い言葉を書き込んできたのが誰なのかを考えると疑心暗鬼になったり、友人に対する不信感が募るという類の声を聞くことが多かった。また「学校に行きたくないと思った」といった声も少なくなく、ネットいじめは、これまでのいじめよりも「怖く」て、精神的に「痛い」ものであると考えられる。

## 3) 学力移動との関連性

子どもたちのネットいじめの有無と学力との間には、何らかの関係性があるのではないかという特質を見出すことができたが、それをより明確にするために、ここでは、「学力移動」の分析フレームに注目してみたい。「学力移動」とは筆者らの研究グループ(原・山内 2009 他)が学力問題を研究するなかでみられた特徴であり、個人の相対的学力が所属集団の内部で上昇移動したのか下降移動したのか(あるいは移動しないのか)によって、その個人の内面的な意識や行動にさまざまな変化が起こることに注目したものである。

本研究においては、ひとまず「学校の勉強がどの程度理解できるか」を学力を表わす指標と置き換えた。そのうえで、「よく理解できることが多い」、「まあまあ理解できる」、「あまり理解できないことが多い」の3分位に分割し、小学校高学年から中学1年にかけて相対的な学力分位がどのように移動するか(しないか)によって、ネットいじめの被害を受ける割合がどのように分布するのかをみてみたい。

\* 「学校の勉強は、どの程度理解できますか」の問いに対する回答。それぞれのセルごとにネットいじめの被害に遭ったことのある割合を算出、「よく」: 学校の勉強

はよく理解できることが多い、「まあ」：まあまあ理解できる、「あまり」：あまり理解できないことが多い

表は小学校高学年から中学1年にかけての学力移動別ネットいじめ被害発生率である。ここからは、ネットいじめの被害が相対的な学力が上昇した子どもたちに多く発生しやすいという特性をもつことが読み取れよう。とくに以前に学力が下位層にあった子が上位に移動した左下周辺のセルにおいて、ネットいじめ発生率はもっとも高く（小学校「あまり」→中学校「よく」：23.1%、小学校「まあ」→中学校「よく」：16.3%）、相対的な学力が移動しないセルにおいては比較的低い数値となっている。

学力が上昇移動した背景には通塾などによる影響が大きいと考えられ、その子らのなかには小学校の高学年まで付き合っていた仲間関係をいったん清算したり、塾や中学校での新しい仲間への乗り換えをすることも考えられる。逆の立場の子からすれば、それまで「自分と一緒に」と思っていた友だちがKY（空気を読まずに）に勝手に乗り換えたことに対して、「エエ恰好してる」とか「なんでやねん」といった妬みややっかみの感情が生まれることは想像に難くない。そういったKYだと見られてしまいがちな子に対して、「何か畏をしかけてアイツに痛い思いをさせよう」といった思いが、周辺の子どもたちをネットいじめへ向かわせる一因となっているのではないかと考えられる。前述の「さらし」には、そうした類の書き込みや昔ネタのリークが少なくない。

#### 4) ネットいじめの被害と加害の関係

ネットいじめの被害と加害は相関関係にあり、ネット上で嫌な思いをしたことのある子が加害者に変貌する「立場の逆転」ともいう

べき悪循環をもたらしている恐れがあることは、これまでも再三指摘されてきたことである。

	加害あり	加害なし	合計
いじめ被害あり	66.0%	34.0%	100.0%
いじめ被害なし	7.3%	92.7%	100.0%

$$(\chi^2 = 103.0, df = 1, p < 0.001)$$

表はネットいじめの被害と加害の関係を見たものである。両者の間には、やはり強い相関が見られ、とくにネットいじめの被害に遭った子の約3分の2が別の子へのいじめに加わっているのである。本調査でも、ネットいじめに加わったことがある子どもたちの多くから「前に自分もやられたから、やり返しただけ」といった自由記述が認められた。こうしてみるとネットいじめの特質は、被害者、加害者という区別が曖昧であるがゆえに、誰でもいじめの対象となる可能性があることにある。

#### 5) 保護者のネットに関する理解・対策

表はネット環境を利用する際に、家庭に何らかのルールが有るかどうかとネットいじめの被害との関係を見たものである。

	ルールあり	ルールなし
ネットいじめ被害あり	11.3%	19.6%

$$(\chi^2 = 18.628, df = 1, p < 0.001)$$

ここからは、ケータイやネット利用に関して何らかのルールを設けている家庭の子は、ルールのない子どもたちに比べて、ネットいじめの被害に遭いにくいことが明らかである（0.1%水準有意）。具体的なルールを問うと、「家でのケータイ使用はリビングに限る（自分の部屋に持って入らない）」や、「夜10時以降は使用しない」、「知らない人からのメールや電話には応答しない」などの使用場所や時間、利用相手を限定するといったルール

を設けている家庭にネットいじめを大きく抑止する効果があることがわかった。また、親も子どもと一緒にルールを守り、たとえば「食事中はケータイを使用しない」で、積極的に子どもとコミュニケーションを図ろうとする家庭の子どもたちにも、ネットいじめの被害が少ないことがインタビュー調査からも指摘された。

しかし、子どもにケータイやネットに関する知識を教えてもらおうとする保護者が一部見られた。一部の親世代にとってパソコンやインターネットはいまだに未知の領域であることが伺える。インタビュー調査では、厳しいルールを設けている保護者ほど「家族ではなく、自分の所有するパソコンがある」と答えている。一方で、ルールを設けていない家庭ほど、「家族が所有しているパソコンはあるが、自分はほとんどさわらない」といった回答が多く寄せられた。ゆえに、ルールを設けていない保護者の家庭では、新しいことを吸収しやすい子ども世代が率先的にインターネットのことを知ろうとする傾向があるのではないだろうか。ケータイやパソコンの設定に子どもたちのほうが詳しいのであれば、彼らが「フィルタリングをはずしてほしい」と申し出たときに、親も「うちの子はとてネットに詳しいから大丈夫だろう」と考え、フィルタリングを外してしまうことが考えられる。実際に、インタビュー調査でも、「子どもの要望があったので、フィルタリングは外しました」と答える保護者が存在し、かれらのほとんどは家庭のルールを設けていなかったり、使用料金の上限を設けるのみといった状態であった。こうした親よりも先取りをしてネット世界に足を踏み入れる子どもたちがネットいじめの被害者となっているとするならば、こうした姿勢が「子どもにまかせる」親の姿勢には疑問が残るといえる。

る。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計8件)

原清治・浅田瞳、ネットいじめの実態とその要因(Ⅱ)、佛教大学教育学部学会紀要、査読無、第11号、2012年、pp.13-20

浅田(山崎)瞳・原清治、ネットいじめの実態に関する実証的研究(2)、関西教育学会年報、査読無、第35号、2011年、pp.161-165

原清治、ネットいじめの実態とその要因(Ⅰ)、佛教大学教育学部論集、査読無、第22号、2011年、pp.133-152

原清治、ネットいじめの実態と背景、現代のエスプリ、査読無、第526号、2011年、pp.104-117

堀出雅人・原清治、「なかま」間に発生するいじめの特質とその要因に関する実証的研究、関西教育学会年報、査読無、第34号、2010年、pp.116-120

原清治・山崎瞳、ネットいじめの実態に関する実証的研究(1)、関西教育学会年報、査読無、第34号、2010年、pp.121-125

山崎瞳・原清治、ネットいじめを規定する要因に関する実証的研究(Ⅰ)、佛教大学教育学部学会紀要、査読無、第9号、2010年、pp.155-172

堀出雅人・原清治、子どもたちにおける友人関係の変化：1.5次集団の形成とネットいじめの実態から、佛教大学教育学部学会紀要、査読無、要第9号、2010年、pp.235-244

〔学会発表〕(計9件)

浅田瞳・原清治「ネットいじめの実態に関する実証的研究(Ⅲ)」関西教育学会第63回大会、2011年11月13日、近大姫路大学

原清治・浅田瞳「ネットいじめの要因に関する実証的研究(Ⅰ)」日本教育実践学会第14回大会、2011年11月6日、佛教大学

浅田瞳・原清治「ネットいじめの要因に関する実証的研究(Ⅱ)」日本教育実践学会第14回大会、2011年11月6日、佛教大学

原清治「ネットいじめはなぜ「痛い」のか」京都学校教育相談研究大会、2011年8月3日、京都市生涯学習センター

原清治・山崎瞳「ネットいじめの実態に関する実証的研究(Ⅱ)」関西教育学会第62回大会、2010年11月13日、関西学院大学

原清治・山内乾史・山崎瞳「ネットいじめの実態とその背景となる要因に関する実証的研究」日本教育学会第69回大会、2010年8月21日、広島大学

原清治・山崎瞳「ネットいじめの実態に関する

る実証的研究(Ⅰ)」関西教育学会第 61 回大会、2009 年 11 月 15 日、大阪樟蔭女子大学  
堀出雅人・原清治「「なかま」間に発生する  
いじめの特質とその要因に関する実証的研究」関西教育学会第 61 回大会、2009 年 11 月  
15 日、大阪樟蔭女子大学

原清治・山崎瞳・堀出雅人「ネットいじめの  
実態とその抑止策に関する実証的研究」日本  
教育実践学会第 12 回大会、2009 年 11 月 7 日、  
岡山大学

〔図書〕(計 1 件)

原清治・山内乾史『ネットいじめはなぜ「痛い」のか』ミネルヴァ書房、224 頁、2011 年

〔産業財産権〕

○出願状況(計 1 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況(計◇件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

原 清治 (HARA KIYOHARU)

佛教大学・教育学部・教授

研究者番号：20278469

### (2) 研究分担者

山内 乾史 (YAMANOUCHI KENSHI)

神戸大学・大学教育推進機構・教授

研究者番号：20240070

浅田(山崎) 瞳 (ASADA (YAMASAKI) HITOMI)

佛教大学・教育学部・非常勤講師

研究者番号：80454859